

〈全校研究主題〉

生き生きと学び続ける生徒の育成

～主体的・対話的に学びながら、一人一人が課題解決できる授業づくりを通して～

〈美術科の生徒の実態〉

- 新しい素材や技法に興味をもち、進んで制作できる生徒が多い。
- 自分の興味・関心に基づいて何を表現するのかを考え、制作できる生徒が多い。
- 既習内容から自分の考えをもち、新たな考えやアイデアを生み出すことのできる生徒が増えてきた。
- 表現することや自分の考えをもつことに消極的な生徒が見られる。
- 限られた表現方法のみにとどまり、表現の工夫に広がりが見られない生徒も見られる。
- 自分が表現した作品に思い入れや愛着を感じられない生徒も見られる。

〈授業で生み出したい姿〉

〈主体的・対話的な姿〉

- *自分の思いや考えを表現することを楽しみ、互いの表現を認め合うことができる。
- *自分の生み出した表現や作品、考えに愛着や自信をもち、自分の成長を自覚できる。
- *仲間や先輩、作家の作品の美しさや工夫を感じ取ることができる。

〈課題解決できる姿(深い学び)〉

- *自分の思いや考えを表現したり、鑑賞を通して作者の思いや作品の工夫を感じ取ったりするために必要な技能を身に付けることができる。
- *既習事項の見方・考え方、表現方法を働かせ自分なりの表現や交流をすることを楽しむことができる。

〈美術科研究主題〉

自と他を見つめ、表現を楽しむ生徒の育成

〈研究主題設定の理由〉

人工知能などのテクノロジーの進歩が加速する中、美術教育においても、改めて生徒に本当に学ばせるべき内容を精選する必要がある。単にそっくり描くことができる、有名な絵画の名前や特徴を知っているだけでは、生きる力にはつながらない。美術教育の本質は、表現することを楽しむことにあると考える。自分の思いを作品で表現したり、鑑賞の活動の中で自分の考えを仲間に伝えたりする活動は、それ自体が本来楽しいものである。その中で得られる、自分の表現したことが周りに伝わり受け入れられるという感覚は、自分自身の存在を受け入れられる自己有用感そのものである。先進国の中でも自尊心が低いとされる日本において、自分は自分であってよいと思えることは何より必要な力であると考え。表現や鑑賞を楽しむためには、一定の見方や知識、思いを表現するための技能が必要である。3年間の指導計画の中で習得の学習と活用の学習を意図的に組み立てた。その中で、自分の思いや考えを表現することの楽しさを味わい、互いにそれを認め合える姿を目指し、研究主題とした。

〈研究内容1〉

「習得」と「活用・探究」の学びのつながりを明確にした題材構成の工夫

- ・表現したり鑑賞したりする上で必要な知識及び技能や見方などを精選し、3年間の学習を見通し習得と活用を繰り返しながら身に付けられるよう題材を構成する。
- ・表現や鑑賞の活動において、表現したいことや自分の考えを、色や形の特性から根拠をもって語り互いに認め合える場を位置付ける。

〈研究内容2〉

一人一人が課題解決できる手立ての工夫

①一人一人が課題解決に向かうための主体的・対話的な学びを促す工夫

- ・生徒の興味関心を引き立てる導入や課題設定、また対話が成立する発問の工夫をする。
- ・既習事項や色や形、構成による効果が視覚的に分かる資料、また自分の考えを図と言葉で整理できる板書やワークシートを工夫する。

②学びの状況を実感できる授業終末の工夫

- ・表現の変化や自分の考えが深まったことが実感できるようワークシートにまとめたり、交流したりする活動を設ける。

研究の基盤 (確かな学級経営と教科横断の共通指導, PDCA サイクルを意図した指導)

- ①互いに認め、高め合える学級集団の育成
- ②生徒の自主的な活動の推進
- ③基礎・基本の定着